

## コロナ禍における教師の協働 —遠隔授業の取り組みを通して—

中 島 才 喜  
岐阜聖徳学園大学附属小学校

### Faculty collaboration during COVID-19 : Utilization of distance learning

Saiki NAKASHIMA

キーワード：コロナ禍 臨時休校 遠隔授業 協働 コミュニティ・オブ・プラクティス

#### I. はじめに

令和2年2月27日、新型コロナウイルス感染症の拡大を防止するため、当時の安倍総理大臣から全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校に対して臨時休校の要請が出された。突然の休校宣言に、私の勤務する学校にも衝撃が走った。これまでに誰も経験したことのない、全く先が見通せない事態。さらに、異動の少ない私学においては珍しく、校長と教頭が同時に退職という事態も重なり、動揺は大きかった。

2020年度が始まって、新型コロナウイルスの感染状況は収束することなく、臨時休校が続いた。保護者からは、「大学や中・高等学校は、オンライン授業をしてみえませんか？」というご心配の声もいただいた。本校ではその頃、紙ベースでの課題郵送と、同封した返信用封筒による課題回収は行っていたが、遠隔授業開始には慎重な姿勢でいた。

本文では、コロナ禍において臨時休校期間が延長されていくなかで、遠隔授業へとシフトしていった教育現場での取り組みを省察する。

#### II. 遠隔授業に向けた協働

著者は、2018年4月から2年間、福井大学教職大学院（現在の福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職大学院 以下教職大学院と記す）で学ばせていただく機会に恵まれた。教職大学院在学中に何度も見聞きした言葉の1つに「協働」がある。なぜ、「協同」ではなく「協働」なのか。国語辞典によると、「協同」の意味は、「二人以上の人が力を合わせて仕事をする」とある。「協働」の意味は、「一つの目的を達成するために、各部分やメンバーが補完・協力し合うこと」とある<sup>1)</sup>。別の辞典では、「協同」は役割分担などが事前に決まっていることが多いのに対し、「協働」はそれぞれができること、得意分野のことをする場合に用いられることが多い<sup>2)</sup>と記されている。

このほかにも、教職大学院在学中に、夏の集中講座で使用した書籍の一冊に「コミュニティ・オブ・プラクティス<sup>3)</sup>」がある。この書籍は、院生全員が1年目の夏に読むもので、教職大学院のバイブルのような位置付けになっていた。企業を舞台にした組織づくりに関する内容であるが、学校現場にも通じる考え方や手法が多く記されている。したがって本論では、この書籍に書かれた内容を活用しながら、岐阜聖徳学園大学附属小学校において実施した遠隔授業実践の詳細と、そこから得られた成果および課題について省察していく。なお、成果および課題については、アンケートにより職員と保護者から寄せられた意見、感想をもとに省察する。

### Ⅲ. 実践内容詳細

今回の遠隔授業を図1に当てはめると、最初のコーディネーターは教頭である。2020年度から教頭になったが、それまでは教務主任でありながら長く情報主任も務め、本校のICT化を推進してきた立場にある。本校は、各教室に電子情報ボードと短焦点プロジェクターを設置し、5、6年生には一人に一台ずつタブレット（iPad）も貸与している。それだけICT教育を推進しているので、すぐ遠隔授業に着手するかと思いきや、初めのうちは慎重に動向を見極めていた。なぜなら、小学生が相手だからである。中高生であれば、保護者が手を貸さなくても、生徒だけである程度のICT操作が可能であろう。ところが、小学生だけで遠隔授業にログインすることは困難であり、ネット上のトラブルにつながる可能性もある。家庭のICT環境やセキュリティの問題など、考慮すべき点は多かった。

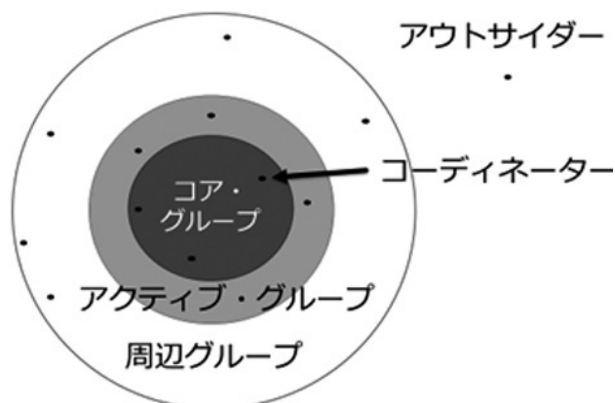


図1 コミュニティへの参加の度合い  
書籍をもとに著者が作成

教頭はまず、職員のなかでICTに詳しいメンバー数人に声をかけ、協力を求める。コア・グループの誕生である。メンバーのなかには、タイミングのよいことに昨年度まで海外の学校に勤務していた教員がいた。そのため、前任校がコロナ禍においてGoogle Classroomを活用して、オンライン授業を行っているという情報を得ることができた。別のメンバーは、6年生担任ということもあり、本校での遠隔授業のトップをきいて実践できるよう、コーディネーターである教頭と共にコア・グループのメンバーとして職員の先頭に立ってプロジェクトを進めた。

次に教頭は、Google フォームを活用して自作のアンケートを作成し、各家庭のICT環境について調査した。学校から各保護者にメール連絡を一斉送信するシステムは活用しているが、保護者からの返信はできなかったからである。アンケートの結果、ほぼ9割の家庭が、遠隔授業を受けることができるICT環境を整えていることがわかった。

それから、チエル株式会社のInterCLASS®Lightという遠隔授業システムを活用することを決めた。図2が、InterCLASS®Lightのログイン画面である。あらかじめ、授業コードとパスワードを一斉メールで配信しておけば、パソコン操作に不慣れな家庭でも簡単にログインが可能である。



図2 InterCLASS@Lightのログイン画面

遠隔授業の見通しが開けると、この確認作業と並行して、コア・グループのメンバーである6年生の主任が、今度はコーディネーター役となり、全学年の遠隔授業の日程調整と時間割作成を行った。表1に5月第二週に実施した遠隔授業時間割を示す。

表1 InterCLASS@Light を活用した遠隔授業の週間予定（例）

	5月11日	5月12日	5月13日	5月14日	5月15日
9:00~9:30	5年2組	3年1組	6年2組	6年1組	
	4年1組	2年1組		2年2組	
10:00~10:30	5年1組	3年2組	4年生全員	2年1組	5年生全員
	4年2組	2年2組			
11:00~11:30	6年1組	6年2組		3年生全員	4年生全員
	1年2組				
13:00~13:30	1年1組	1年生全員		1年生全員	

ICT機器の操作に慣れた若手の教員たちがアクティブ・グループとして機器のセッティングや操作方を職員にレクチャーする。一方、授業づくりに入ると、今度はベテランの学年主任たちがコア・グループとなってリードしていく。また、PowerPointでの授業作成になると、再びアクティブ・グループが中心となって活躍する。このように、組織の中で場面や作業内容に応じて活躍するメンバーが替わっていった。IIで記したように、それぞれが得意分野で自分の能力を発揮し、活躍する「協働」を実際に目にすることができた。

次に、実際の授業場面の写真をもとに、遠隔授業の仕組みを記す。図3、図4は、5年生と2年生が実施した遠隔授業の様子である。本校で実施した遠隔授業に用いた機器は、次のようである。

- ・電子情報ボード
- ・短焦点プロジェクター
- ・ホワイトボード
- ・ノートパソコン
- ・タブレット



図3、図4 InterCLASS@Light を活用した遠隔授業の様子

図3 や図4のように、ホワイトボードには、電子情報ボードまたは別のノートパソコンで開いたPowerPointが映し出される。それを、ホワイトボード正面のノートパソコンに内蔵されたカメラで映し、配信する。同時に、そのノートパソコンの画面上には、何時何分に誰がログインしたか、カメラがとらえた映像、右端には児童の反応（はい、いいえをボタンで押したものや、タイピングで入力したもの）が時系列順に記録されていく。この記録は、テキスト形式で保存可能なので、教師は授業を振り返るときに活用できる。手元にタブレットを用意したり、図5の画面を電子情報ボードに大きく表示したりするなどの工夫をすれば、これら児童の反応が見やすくなる。問いかげに対して文字で返信するというタイムラグはできるものの、双方向の授業がより充実する。

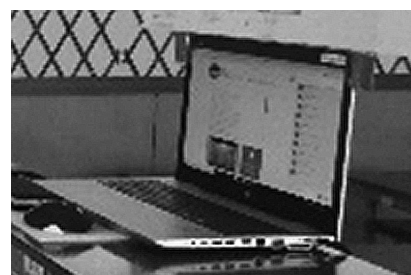


図5 ホワイトボードを映すノートパソコンの画面

## IV. 考察・分析

### 1. 遠隔授業の成果

以下に、遠隔授業を実施した職員たちから聞いた成果と課題を記す。

#### ①教員の協働が生まれた

Ⅲに記したように、初めて経験する事態のなかで、それぞれが「子どもたちのために」という共通の目標に向かって、それぞれの得意分野で力を発揮し、助け合って遠隔授業を実施することができた。新年度になって職員の体制が変わったなかで、校長や教頭のリーダーシップのもと、職員全員が同じ目標に向かって協働し、互いのつながりを深めることができたのは大きな成果であった。

余談ではあるが、休校期間中、当然のことではあるが給食もなかった。すると、職員親睦会担当の教員の取り計らいで、時々、デリバリーの昼食を注文してくれた。通常の学校生活において、職員全員がそろって昼食をとる時間はない。この、全員そろっての昼食が、実は遠隔授業というプロジェクトに向かって協働するうえで、とても重要な時間となった。互いに、遠隔授業をした際の反応や配信状況を交流し合い、よりよい遠隔授業にしていくためにアドバイスをし合う場となった。「コミュニティ・オブ・プラクティス」には、非公式な会議室を設けることや一対一の会話を通じてセミ・プライベートな交流を図ることの重要性についても書かれている。昼食時間は、協働を推進する貴重な時間であった。

#### ②子どもと保護者に安心感を届ける

どの学年も、ほぼ全員の児童が遠隔授業に参加してくれた。全員参加であればさらによかった。通常授業再開後に保護者から得た遠隔授業に対する感想の中に、以下のような内容が多かった。

- ・遠隔授業を楽しみにしていました。
- ・先生の顔が見られてうれしかった。

上記のような感想は、実際に子どもたちからもよく耳にした。

1年生にとっては、入学式と学級開きのみを行い、そのまま臨時休校延長になってしまったため、実質的に授業を行うのは遠隔授業が初めてであった。入学式を経験したものの、小学校生活をスタートしきれないような不安に陥る子どもや保護者に、映像で伝えられたことが大きかったと1年生主任が話していた。文字だけではなく映像で伝えられるうえ、「はい」のボタンが反応として返ってくるからだ。授業の最後に、登校再開後のマスクケースや水やり用のペットボトルキャップなどを映像で見せるなど、お知らせの場としても利用したそうだ。

#### ③学校再開後のスムーズな授業進行

昨年度からの持ち上がりではない教員にとっては、②にも記したように、始業式以来、「はじめまして」という状態に近い子どもばかりになるが、遠隔授業で双方向のつながりを持てたため、スムーズに授業に入れたと2年生主任が話した。

2か月間の休校により、授業の遅れが心配された。しかし、遠隔授業で扱った内容については、「あ、これ見たことがある!」「遠隔授業でやったところだ!」と、子どもたちがよく覚えていた。そこで、授業進度に軽重をかけ、大きな遅れを生むことなく一学期を終えることができた。大事な所では、授業を深める余裕もあった。

#### ④教員研修の場としても機能

一般的に、教育現場においては研究授業を自ら率先して引き受ける教員は多くないだろう。著者が教職大学院で学んでいるときにも、他校の研究主任の多くが、どうしたら喜んで授業公開をしてくれるか悩んでいた。もちろん、本校においても例外ではない。

しかし、遠隔授業に取り組む中で、興味深い現象が起きた。該当学年が遠隔授業を実施している間、他の教員もログインして、接続が安定しているか、また映像や音声のトラブルはないかとチェックし合っていた。それが続くにつれ、次第に互いの授業内容について話題にするようになったのだ。「あの提示の仕方はいいなあ。」「今の発問は上手だなあ。」などと、映像を見ながら言葉が飛び交う。多くの教員が映像に見入り、口々に感想を述べていた。当然、これらの感想は授業者にも伝わった。



さらに興味深かったのは、ベテランの教員が、午後からの遠隔授業を前に、「緊張するから、昼食は終わってからとることにする。」と話したのだ。慣れない ICT 機器の操作に対する緊張もあっただろうが、その教員曰く、「低学年は特に、画面の向こうには、子どもの後ろに保護者もいる。」とのこと。遠隔授業が、授業参観の意味合いも果たしていたのだ。ベテランのこの言葉は、現場により緊張感をもたらした。このように、適度な緊張感の中で、授業づくりから実践という教員研修と、保護者による授業参観という意味合いをもった遠隔授業となった。

## 2. 遠隔授業の課題と今後の対策

次に、遠隔授業の課題と今後の対策を記す。

### ①本当の意味で全員参加できるものに

今回の遠隔授業には、ほぼ9割の児童が参加した。しかし、学級や学年全員の子どもが参加したとは言えなかった。理由の多くは、保護者の仕事の都合で参加できないというものだった。低学年においては、キーボード入力を保護者にしてもらっていたという実態もあったと聞いた。そうでなくとも、キーボード入力あまり得意でない子どもは、「はい」か「いいえ」のボタンを押す反応以外は、返すことができなかったことになる。これでは、本当の意味で全員が参加し、全員に届く授業ができたとは言いがたい。

日頃の情報の授業において、キーボード入力のスキルをさらに磨くことが必要である。さらに、授業を実施する教員側は、それぞれの児童の実態をふまえた工夫をしなければならない。

### ②リアルタイム授業の難点

動画をインターネット上にアップロードする形式であれば、いつでも、どこからでも、何回でも繰り返して授業を視聴できる。しかし、今回本校が実践した方法だと、リアルタイムの授業に参加できなければ、別の機会はない。学校再開後に遠隔授業に参加できなかった子どもを対象に、パワーポイントを見せるなどして補うことはしたが、やはり多くの仲間と一緒に学び合うことは難しかった。

このほかに、ICT 機器を活用する際の宿命かもしれないが、音声や映像のトラブルで、予定した範囲まで授業が進まないこともあった。今後は、録画してアップロードする形式との併用も検討する。

### ③教科や学年による特性

英語科の主任は、やはり子どもの音声による反応がほしいと言っていた。教員側の発音がうまく聞き取れないといったケースもあった。

算数科の教員は、ある程度のやりとりは可能であるが、授業内でできる内容に限られると言っていた。目の前に子どもがいれば、問題を解く様子を見ながら進めることができる。個に応じて支援をしたり、新たな課題を与えたりすることもできるだろう。しかし、子どもの反応が見えないだけに、全員一律に問題を解く時間を設定することになると、待っている時間が増える子どもが出る。逆に、待つ時間を少なくすると、もっとじっくり問題と向き合いたいという子どもにとっては、負担になる。

1年生担任は、学習内容以前に、鉛筆の持ち方など学び方の指導を徹底したいが、確かめることができないと言っていた。子どもの発達段階や教科の特性を考慮した授業内容、実践方法を吟味する。

### ④信頼関係があってこそその遠隔授業

今回に限ったこと（そうであってほしい）だが、新年度が始まって入学式や始業式を実施しただけの状態でも遠隔授業に向かうことになった。持ち上がりではなく、初めて担任をする教員にとっては、画面越しにほぼ初対面に近い子どもを相手に授業をすることになる。ただでさえ、直接向き合って授業をしているときのように、表情も声も感じることはできないのに、たった1日、ほんの数時間の出会いだけでは、反応を予測することもつかむこともできない。遠隔授業で最大の課題がこの点だった。

ふと、コロナ禍で学校現場における様々な「当たり前」のありがたみを痛感したことを思い出した。子どもたちが登校してくること、教室に行けば子どもたちの笑顔が見られること、授業中に問いかければ即座に反応を返してくれること……。万が一、再び今回のようなタイミングで遠隔授業を行うならば、子ども同士、子どもと教員が打ち解け、安心して授業を受けられるよう、一層の工夫をする。

## V. おわりに

5月のゴールデンウィーク中に、私学振興・青少年課の依頼で、6年生の保護者に電話でアンケートを実施する機会があった。何点かの質問の中に、オンライン授業に関する質問も含まれていた。その際に、複数の保護者から以下のようなご意見をいただいた。

「確かに勉強も大事ですが、勉強はなんとか親でも教えることはできます。ただ、友人関係のほうは、どう頑張っても親ではどうしてやることもできません。毎日、友達に会うことができず、一人で遊ぶ姿を見ると、親としては友達に会わせてやりたいと思うし、いつまで友達に会えないのだろうかと不安になります。」

別の保護者からも、学校が再開されてから次のようなご意見を頂いた。

「姉は、(InterCLASS@Light とは)別のシステムを使って朝のホームルームや授業をしてもらっています。ただ、一度に参加する人数が多すぎるため、一時間の授業でじっくりと学ぶことができるのは、断然附属小の方法です。ただ、先生の顔は見られても、友達の顔が見られません。それぞれに、一長一短がありますが、親として何ともしやれないのは、友達のことです。」

これらのご意見は、今なお胸の中に残っている。6年生教室の掲示物からは、分散登校中や一斉登校再開後に書かれた子どもたちの感想も見つけた。

「久しぶりの学校でうれしかったが、半分しかいないのはさみしかった。」

「やっぱり全員がそろろうと、とてもうれしかった。」

学校という場所は、先生と児童・生徒がいて初めて成立する。このことは、休校期間中に痛いほど肌で感じた。しかし、当然のことながら、子どもたちにとっては「仲間」がいてこそ、初めて本当の学校なのだということを改めて思い知らされた。そして、それは保護者では何ともしようがなく、我々学校職員だけが学校において仲間と仲間を会わせ、結びつけることができるコーディネーターなのだ痛感した。

本文を作成している10月になっても、新型コロナウイルスの猛威は収束する気配すらない。それどころか、時期的にインフルエンザの流行と両方を懸念する声が高まっている。考えたくはないが、万が一、再び感染拡大を防止するための臨時休校措置がとられたとき、今回の省察や貴重な保護者の声をもとに、学習内容と仲間による心の癒しの両方を届けられるような、そんな方法を職員で協働して探り、実践したいと考える。最も、このまま休校になることなく、毎日、子どもたちが健康かつ笑顔で、仲間と学校で学び続ける日々が続くことが一番である。

今回の実践を投稿するにあたり、教育実践科学研究センター長の柘植良雄先生から、次のようなお言葉をいただいた。

「コロナ禍でほとんど実践ができない状況だと思いますが、こういう特別な状況だからこそ、実践の形を記録として残しておく必要があると思うのです。」

柘植先生のお言葉を受け、紙ベースの課題郵送から遠隔授業へとシフトしていった過程を省察することができ、大変意義深かった。なぜなら、あの時の必死な思いを今一度思い起こすことができたからである。もう一つ思い起こしたことがある。それは、平成31年3月28日に本学で行われた実践研究報告会に、教職大学院の柳澤昌一研究科長がお越しになられた時のお言葉である。

「福井の学びは、後からじわじわ効いてくるからね。」

著者は今年度から教務主任となり、休校延長のたびに欠課となる授業時間数をカウントし、学校再開後にその時間数を補うためのシミュレーションに追われていた。本来ならば、中心となって遠隔授業を推進すべき立場なのに、できなかった自分を反省している。一方で、職員の協働に助けられたことや、教職大学院で学んだ理論を現場で体感することができたことに感謝している。次の実践では、自分がコーディネーターやコア・グループとして推進していけるよう、実践力をつけたい。

## 注・文献

- 1) 金田一京助(1989)：「新明解 国語辞典 第四版」，三省堂，310.
- 2) 違いがわかる事典 <http://chigai-allguide.com>
- 3) Wenger, E., McDermott, R., and Snyder, W.M.. (2002)：「コミュニティ・オブ・プラクティス」(桜井祐子訳)，翔泳社.